



福祉見てある記④③

東日本大震災の現地にたつて

被災地の二度の訪問

3月11日午後2時46分、東日本大震災が起き、次いで大津波が沿岸部を襲った。福島原発は地震とともに緊急停止したが、津波の到来によって全電源を喪失し制御不能となり、前例のない大規模事故を起し今なお継続していることは全世界に知れ渡っている。

私は4月半ばと6月8日から10日までの二回にわたって東日本大震災の被災地を訪問してきた。場所は岩手県釜石市、大槌町から大船渡市、陸前高田市、宮城県の気仙沼市、石巻市、七ヶ浜町、仙台市、亶理町、山元町、福島県相馬市、南相馬市、原発を迂回していわき市までの沿岸部を自動車で回った。それぞれの地区では、地元の方に案内してもらい、また、それぞれの方々に現状と課題についてお話を伺うことができた。障害を持っている人々が、この震災被害の中でどのようにして生きているのか、またその課題が何なのか、が私の切り口であったので、おのずとその関係者にお世話になった。また、広汎な地域を回ったのは、被災の状況が一樣であるはずがないという考えに基づいてのことであった。

ともかく現地に行かなくてはと焦燥感に駆られていたところ、元本学教授で現在、内閣府の障害者制度改革推進室長の東俊裕先生が、東京から車を出すので一緒に行こうと声をかけてくれた。6月の訪問調査では、私の方でメンバーを集めた。もちろん、私の本来の専門である経済学と社会政策の観点から調べるべきことは多々あるのだが、短時日での訪問なので、とにかく現地にたつことだけを考えた。

現地にたつて言葉を呑む

かろうじてライフラインが復旧し始めた4



壊滅した大船渡線

月15日早朝、私たちは岩手県釜石市にたどり着いた。被災現場に立つと、言葉を失う。確かにニュース映像で見ていたはずの光景なのだが、ぼう然と立ちすくむしかない。同行者ともども、見えるもの、失われたはずのものについて、止めどなくしゃべり続けるのだが、ことばは宙を舞うだけである。本来海岸部で津波から町を守るはずの大堤防が内陸に運ばれておりその前にたつ時、山際にまでに打ち上げられている外洋漁船をすぐ下から見上げた時、鉄道の線路が流されプラットホームと高架橋の一部だけが残っているのに向き合った時、津波が駆け抜け多数の死者が出た老人ホームの前に立つ時、建設途中の仮設住宅のすぐ足下に壊滅した町が広がっているのを見る時、がれきの中に捜しに来る家族のためにわざわざ置かれているアルバムや卒業証書、かばん類を見た時、さらに遺体の在りかを示す赤い布のついた竹竿がたっているのを見た時、そしてまた原発から30キロ圏内の保健センターで行われている放射線測定の実行に並ぶ時、非日常というにはあまりにも形容し難く、意味のないことを語り続けていた。感傷でも共苦でもない。その時に居合わせなかっただけに、その時起きたことを自分の中に再現することを拒否するような自分にかえって驚く。

現地訪問の方法論

第一回目の現地訪問から帰ってきて、インターネットで自分が回ったところを探す。津波の映像がYoutubeにはあふれている。この映像を見た時に初めて客観化できたような気がした。第二回目の現地訪問から戻ってきてからは、死者や行方不明者、被災地域の広がりなどのデータを見続けている。

とにかく現場に立たなければ、何も言えない、分らない、地元の人々と会わなければ理解はおろか感じることもまたできない、そんな確信めいたものに引きずられて現地を訪問した。たかが数日のことであるが、そこが出発点なのだ。これは、水俣学の方法論そのものである。というよりも、私自身が若い時から身に付けてきた生き方でもある。理論と思想を論ずるのが私の研究スタイルであるのだが、それを裏付けるのは、「直面する」ということなのだ。のっぴきならないところに身を置くところから、学は始まる。

まつろわぬ東北の再興：展望めいたこと

さて、現地訪問からお伝えすべきことをいくつか提起しておこう。4月に直面していた緊急対応の時期はすでに終わっている。いわゆるライフラインは復旧し、水、ガソリン、日常生活物資や薬などの不足はほぼ解消された。避難所から仮設住宅への移転も急ピッチ



がれきの前の仮設住宅、陸前高田市



陸に上がった漁船—気仙沼

で進んでいる。がれきの片づけなども地元の雇用を中心に加速度的に進んでいる。報道もされているように、それらの一つ一つに問題が多いとしても、それらをあげつらっていてもあまり意味はない。そもそも地元住民が動き始めている。

とはいえ、もともと決して豊かではない東北である。統計的に見ると所得水準は全国平均よりは10%程度低い。高齢化率も高い地域である。大都市圏を除いて社会資源も決して充分ではない。高速道路網の整備が完成したのが10年ほど前、東北新幹線が新青森まで延伸したのは震災のじつに一週間前のことである。歴史的に見れば、古代より中央権力にまつろわぬ民の生きてきた地域でもある。沿岸部は、近代的な産業漁業が入ってくるまでは零細な漁村がリアス式海岸の入江ごとに広がっていた地域だ。戦後高度成長期は労働力送りだし地域、オイルショック以降、地元政治家の力もあり徐々に開発が進んでいた地域でもある。

そうであるからこそ、何年、あるいは何十年もかかるかもしれない復興は、新たな東北像を構築することになるであろう。そこでは、社会的な力と住民主体の新たな展望が俟たれる。もし、震災復興支援が今後も求められるとすれば、そこに核心がある。

(本研究員 花田 昌宣 社会政策)